

富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価

高橋 浩 二

1 本稿の目的

古沢塚山古墳は、富山市古沢字中尾根に所在する前方後円墳である。呉羽山丘陵の頂部からやや下がった標高約90mの所に位置し、丘陵裾からの標高差は約60mを測る。終戦直後までは墳裾を巡って畑作が行われていたらしい。

古墳の存在は、昭和50（1975）年に行われた富山市教育委員会による測量調査ではじめて周知されるに至った。それによれば、墳長は40.95mである。墳丘は全体的に整った形を呈する。後円部と前方部との墳頂面の比高差がほとんどないこと、また前方部が八の字状に開くことなどの特徴を有しており、前方後円墳の編年観から中期前半に比定されている（富山市教育委員会1976・富山市史編さん委員会1987）。また、これを受けて前方後円墳集成では5期頃に編年され（岸本1993）、さらに近年では中期中葉（5世紀中葉）頃に降る可能性が指摘されている¹⁾（小黒2005）。

古墳中期以降、県内各地では前方後円墳の築造が停止していくが、その中において本墳は中期に比定される数少ない前方後円墳の一つであるとともに、呉羽地域における首長系譜の変動を考える上では重要な位置を占めている。

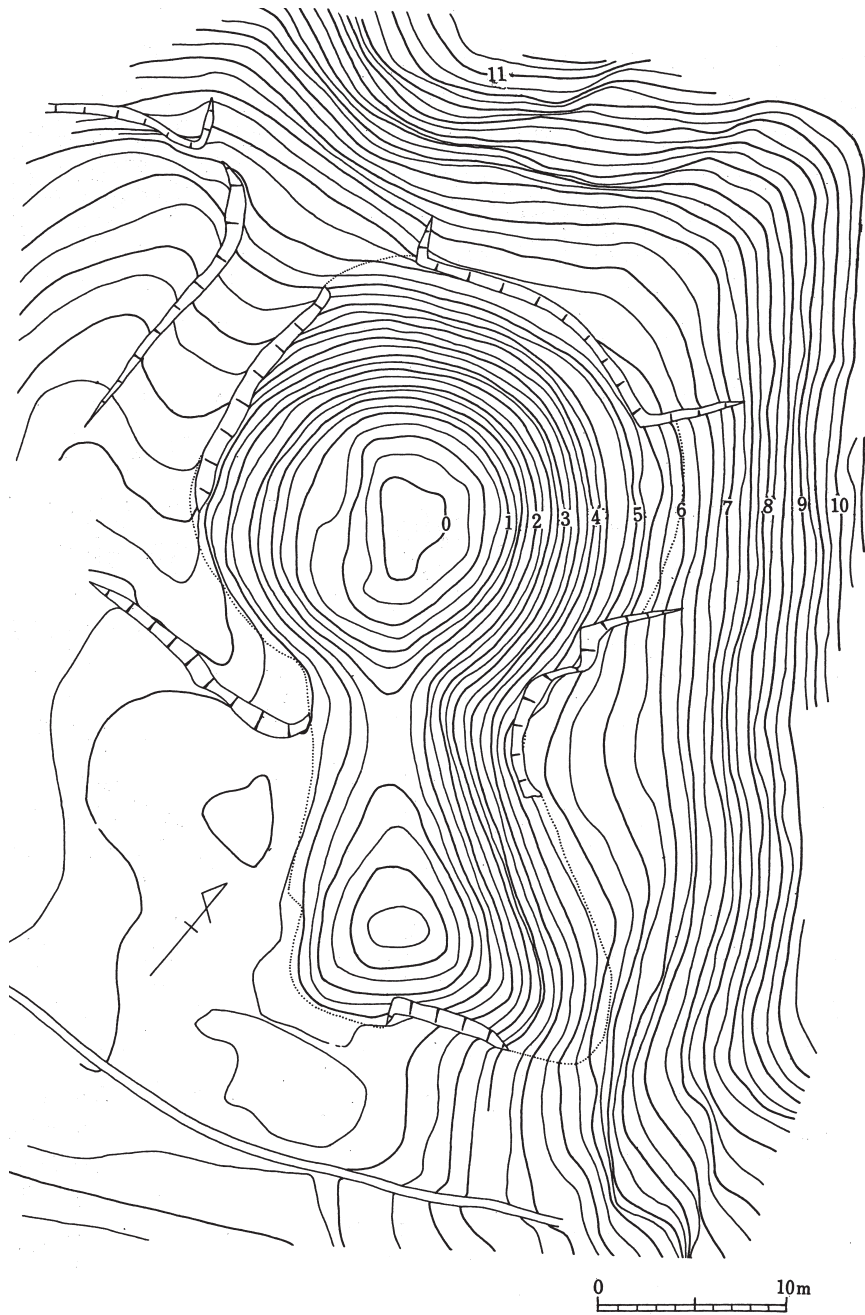
富山大学人文学部考古学研究室では、古墳の重要性についてさらに検討をすすめていくために、また従来相対高による測量図を絶対高の表記に改めることを目的として、人文学部授業「考古学実習」を兼ねて再測量を実施した。ここではその成果について述べるとともに、古墳の編年的評価を行うこととする。

2 再測量の成果

古墳は、呉羽山丘陵から北西方向へ派生する尾根の緩やかな傾斜面（傾斜角約5°）に築かれる。尾根の高所側に前方部を置き、後円部は傾斜面の縁辺付近に位置する。古墳の西から南側には比較的広い平坦面が見られるのに対して、後円部の背後は急激に下降する斜面となる。また、東側は谷へと続く急斜面となる。

墳裾は、前方部よりも後円部側、また後円部・前方部ともに西側よりも東側の方が低い位置を巡る。すなわち、後円部の墳裾は、西から南側で86.000～89.000mの等高線の間認められるのに対して、主軸上に位置する北西側から北側では85.750～86.000m、東側では

86.000 ~ 87.000m の等高線の間にそれぞれ位置する。同様にくびれ部の墳裾は、西側では89.250mの等高線付近を巡るのに対し、東側では87.000 ~ 87.250mの等高線の間に位置する。前方部の墳裾は、西側側面で89.500 ~ 89.750m, 東側側面で87.000 ~ 87.250mの等高線の間にそれぞれ位置している。前方

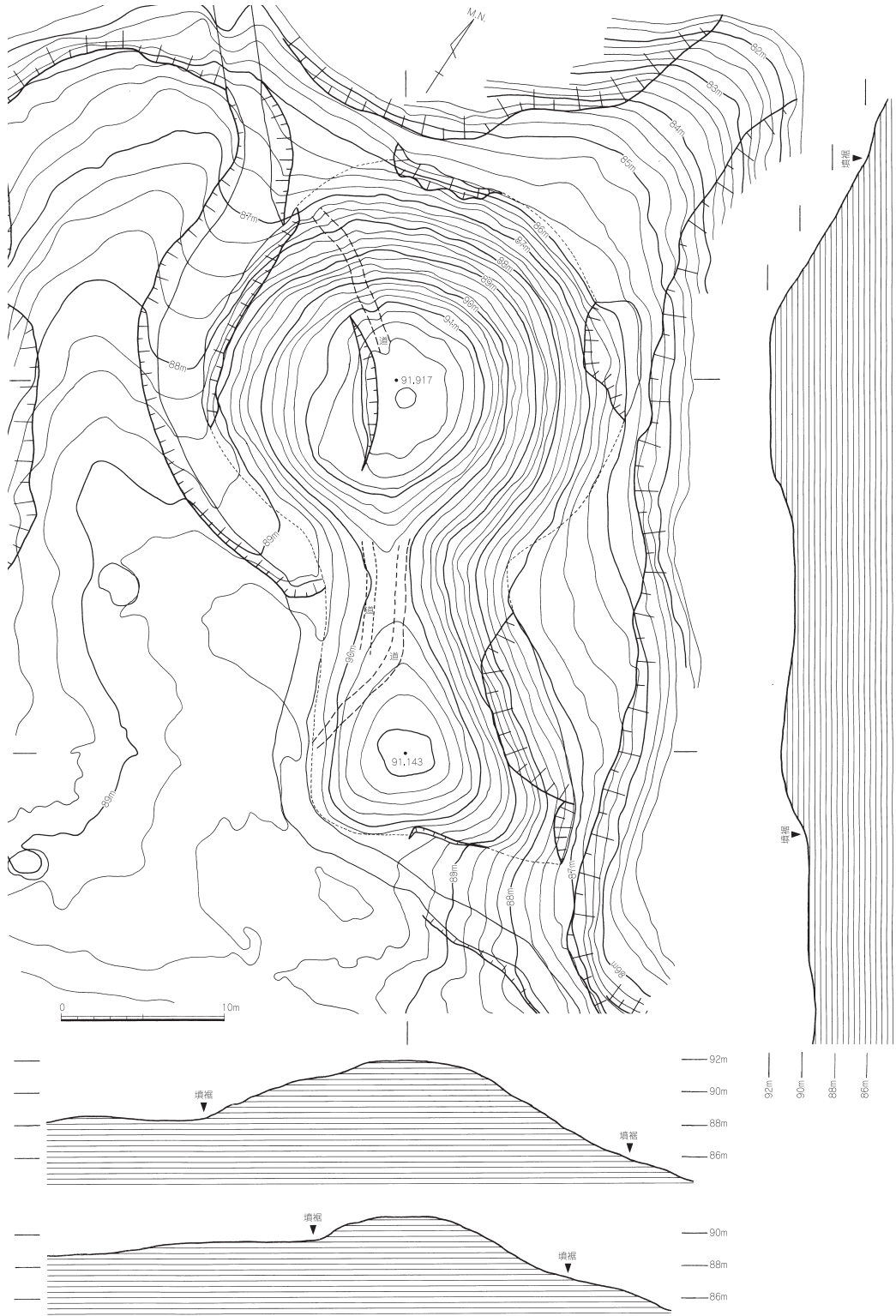


第1図 富山市教育委員会1976による墳丘測量図(S=1/400)

部前端の墳裾は、主軸上の位置から急激に傾斜して東側隅角部につながる。

後円部北側と、東側くびれ部から前方部側面にかけては、墳裾に接して幅4.0 ~ 5.0mの平坦面が存在し、これは墳裾に伴うテラス面と考えられる。後円部西側からくびれ部の墳裾を巡っ

富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価



第2図 古沢塚山古墳墳丘測量図（点線は墳裾、S=1/400、山本教幸・高畑郁美製図）

て見られる周濠状の凹みは山道によるもので、これにより墳裾の一部が削られている。山道は前方部の西側側面から隅角部の墳裾を巡っていくが、この部分は当初より平坦面をなしていたと考えられる。

各部位の計測値は次のようになる。墳長は主軸上で約41.8mを測り、富山市教育委員会の見解よりもわずかだが大きくなる。墳丘主軸はN-33°-Wである。後円部は直径約24.8～27.0mのやや横長の楕円形を呈する。前方部は長さ約17.0mで、比較的短いものと言える。前端部での幅は約16.2mである。くびれ部の幅は約11.8mを測る。後円部の高さは北側で約6.15m、東側で約5.15mであるのに対して、南側では約3.15mとなる。同様に、前方部の高さは東側で約3.9mに対し、西側で約2.5mとなる。くびれ部の高さは東側で約2.75m、西側で約0.75mとなる。このように平野部へ臨む急斜面側（北から東側にかけて）とその反対側（西から南側にかけて）とでは、墳丘の高さに顕著な差が生じていることがわかる。また、後円部の高さは前方部と比べて高いものと言えるが、両墳頂面の比高差については約0.77mと小さい。

富山市教育委員会による測量図と比較してみると、前方部東側隅角部を若干高い位置で把握した点以外は、墳裾の位置を変更する箇所はほとんど認められない。なお、富山市教育委員会の図では後円部の北から東側にかけて墳丘斜面下半部に1.0m程の平坦面が見られるが、今回の測量ではこれを確認できなかった。また、後円部北側と東側くびれ部の各墳裾の位置には削平が見られ、一方今回の図では前方部東側側面に斜面の崩落が認められるが、これは地表面の経年変化あるいは測量図の表現方法の違いによるものである。いずれにしても、墳丘の遺存状況は比較的良好と言える。後円部墳頂平坦面の西寄りには小規模な削平が見られるが、盗掘坑のようなものは認められない。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

第1表 古沢塚山古墳計測値一覧

墳	形：前方後円墳	後円部高さ(北側)：約6.15m
全	長：約41.8m	”(東側)：約5.15m
後円部	直径：約24.8～27.0m	”(南側)：約3.15m
前方部	長：約17.0m	前方部高さ(東側)：約3.90m
前方部	前端幅：約16.2m	”(西側)：約2.50m
くびれ部	幅：約11.8m	くびれ部高さ(東側)：約2.75m
後円部	平坦面規模：約5.0～8.0m	”(西側)：約0.75m
後円部	最高点標高：91.917m	後円部と前方部の墳頂の比高差：約0.77m
前方部	最高点標高：91.143m	後円部と前方部の墳裾の比高差：約2.85m

3 古墳の評価

古沢塚山古墳の特徴としては次の2点が挙げられる。第一に、後円部と前方部との墳頂面の比高差が小さいことである。はじめに述べたように、このことは時期比定の根拠の一つになっており重要と言える。これについては墳裾をあらためて確認してみると、前方部隅角部からくびれ部まではほぼ同一の等高線に沿って巡るのに対して、くびれ部から先は墳裾の位置が急激に傾斜していくことがわかる。後円部と前方部との墳裾の標高差は最大で約2.85mを測る。したがって、後円部は比較的高い墳丘をもつにもかかわらず墳裾が低い所に位置するために、前方部との比高差が目立たないのである。これは、古墳のある場所が傾斜面にあたり、その低所側に後円部、高所側に前方部が築かれたことに起因する。

第二に、墳丘主軸線をはさんで墳形が非対称になることである。すなわち、墳丘主軸線から西側を見ると、前方部は直線的であり、後円部はほぼ正円を呈するものと推定される。それに対して、墳丘主軸線から東側では、前方部が大きく八字状に開き、また後円部の幅が若干広がっている。このように墳丘主軸線を境にして墳形がやや異なるのは、平野部へ臨む急斜面側の墳裾が反対側と比べて、後円部では約2.0～3.0m、前方部では約1.4m下の低い所にそれぞれ巡り、それによって墳丘の幅が若干広がるためである。前方部前面の地形を見ると、墳丘主軸線を境にして平坦面（西側）から斜面（東側）へと推移していく等高線の様子が確認される。つまり、第二の点についても傾斜面に築かれることが要因となっている。

以上のように、後円部と前方部との比高差が小さいこと、そして非対称的な墳形になることは、古墳が傾斜面に築かれるという同根の原因に起因するものと捉えられる。

一般的に、丘陵上の前方後円（方）墳は、尾根の高まりに後円（方）部を置き、前方部は尾根の傾斜に沿わせて低所側に築かれることが多い。これは自然地形を最大限に利用して墳丘を築くためである。よって、本墳の場合、丘陵上の前方後円（方）墳としてはやや特異なあり方を示すものと言える。低所側にあえて後円部を置くのは、傾斜面の低い位置に墳裾を築いて後円部の高さをより強調するため、つまり平野部からの視覚的な効果を強く意識したことによるものと考えられる。

したがって、これまで時期比定の重要な根拠とされてきた後円部と前方部との比高差が小さいことや、また前方部が八字状に開くことについては、地形的要因に規定された結果によるものと捉えられる。そして古墳は、前方部を幅広く高くするというよりも、むしろ後円部を重視して築いたものと考えることができる。前方部が比較的短いことを勘案するならば、前期的な墳丘形態を残す前方後円墳として評価することが可能と言えるだろう。

ところで、尾根の低所側に後円部、高所側に前方部を置くケースは、隣接する富山市呉羽山丘陵No.26古墳（約20m）、氷見市朝日瀧山1号墳（約33m）や小杉町変電所西古墳（約42m）でも認められる。これらの古墳はやはり後円部と前方部との比高差がほとんどないか、あるいは



第3図 各古墳の墳丘形態

(左から変電所西古墳、朝日湯山1号墳、呉羽山丘陵No26古墳、S=1/800)

※なお、図は富山考古学会編1999、氷見市史編さん委員会2002、田島1990より引用、一部改変した。

は前方部の方が高く築かれている。また、墳丘が半壊した時点での発見であるが、朝日長山古墳(約43m)についても低所側に後円部を置く例とすることができる。しかし、後期古墳の朝日長山古墳を除いては時期が不明確²⁾なので、現状ではこのような後円部・前方部の立地的関係が築造時期を反映するものかどうかについては明らかでない。

呉羽山丘陵および羽根丘陵に存在する前方後円(方)墳は現在7基ほどが知られるが、前期に比定される前方後円(方)墳はいずれも丘陵の東縁辺に沿う形で墳丘主軸を概ね北東-南西方向へ向けるのに対し、古沢塚山古墳と呉羽山丘陵No.26古墳は丘陵東縁辺から奥まった位置に築かれ、墳丘主軸を90度異なる北西-南東へ向ける。さらに、前者の古墳が富山平野を一望する場所に築かれるのに対して、古沢塚山古墳は射水平野など県西部を見晴らす立地にある。このように古沢塚山古墳は、呉羽山丘陵上にある前期古墳とは立地や眺望が大きく異なっており、このことを重視するならば、中期以後の古墳と推測することが可能と言える。

4 まとめ

以上のように、従来とは異なる視点から古沢塚山古墳を積極的に評価してきた。再検討の結果、古墳の編年の根拠になっている後円部と前方部との比高差や、八の字状に開く前方部の形態については、地形的な要因に規定されたものであることが明らかになった。これは傾斜面を選んでそこに古墳を築き、それによって平野部に面する側の墳丘を高く見せるという効果を強く意識したものと考えられる。したがって、これまでの編年の根拠はその意義が低下することになる。近在する古墳との立地的関係や山裾の集落との関係³⁾などから推測することも可能であるが、しかしいずれにしても築造時期を決定付ける根拠を欠いており、古墳の時期について

は従来どおり中期前半とする見解に従うのが現状ではもっとも混乱が少ないものと思われる。

なお、中期以降の前方後円墳とすると、小矢部市若宮古墳（約50m）と朝日長山古墳に次ぐ規模をもつことになる。また、呉羽山・羽根丘陵上においては前期および後期の古墳は明らかにされているが、中期古墳の存在は未解明である。よって、古沢塚山古墳の編年的位置付けが、他の首長墳の編年や地域勢力の動向を考える場合に及ぼす影響も大きく、築造時期の早期の解明が期待される。今後は、前期に遡る可能性や、逆に後期に降る可能性についても考慮しながら、さらに比較研究をすすめていくことが必要だろう。

最後に、富山大学人文学部考古学研究室による測量調査は、2003年3月10～13日にかけて実施したものである。その後の検討などで報告が遅れたことをお詫びしたい。調査や写真の掲載にあたっては富山市教育委員会、藤田富士夫氏にご協力をいただいた。記して感謝を申し上げたい。なお、調査参加者は以下に記すとおりである。

岸田徹・井出靖夫・山本教幸・岡田幸・折田晃子・北川康介・佐藤絵理奈・高田博文・丹羽直美・宮田志保・向嶋 裕・小川卓哉・坂野井絵里・関根章義・西本智子・阪 英子・細田隆博・本田晃久・間野 達・伊賀崎拓郎・菟原雄大・久保浩一郎・黒田佳恵・小林みのり・牧野啓太郎・佐々木優

注

- 1) 古沢塚山古墳は、氷見市朝日瀉山1号墳と墳丘形態が類似し、より古い特徴をもつことが指摘されている。なお、朝日瀉山1号墳については、後円部の南東側で5世紀後葉頃に比定される須恵器片が表採されている。
- 2) 朝日長山古墳以外はいずれも未発掘である。呉羽山丘陵No.26古墳については、前方部が八の字状に大きく開いており、前方後円墳の編年観から後期前半頃の築造と推定される。なお、後期前葉の朝日長山古墳よりも新しい、富山県最後の前方後円墳と考えられている。また、変電所西古墳については、隣接する五分一古墳に後続する前期古墳と推定されている。朝日瀉山1号墳については1)の通りである。
- 3) 眼下には漆町13～14群並行期（古墳中期後葉～末葉）の土器が出土した古沢A遺跡が存在しており、旧稿（高橋2007）ではこの集落との関係を重視して古墳の時期を若干新しく推測した。

参考文献

- 小黒智久2005「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第25号、富山考古学会
- 岸本雅敏1992「越中」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
- 高橋浩二2007『富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－』日本海学研究叢書、富山県・日本海学推進機構
- 田島富慈美1990「北陸における前方後円・後方墳の墳丘の変化と意義」『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告－北陸の前方後円・後方墳の一考察－』
- 富山考古学会編1999『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム発表要旨・資料集
- 富山市教育委員会1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』
- 富山市史編さん委員会1987『富山市史』通史〈上巻〉
- 氷見市史編さん委員会2002『氷見市史』7資料編5考古

富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価



古沢塚山古墳全景写真

(上: 前方部から後円部側面を見る 下: 前方部前面から後円部を見る 富山市教育委員会提供)